

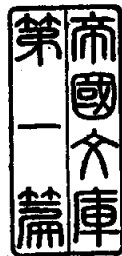
東京帝國大學教授  
文學博士

藤村作校訂

# 珍本全集

前

東京  
博文館版



# 解題

藤村作

正月摘

六冊 白眼居士作 貞享五年刊

作者は柳亭種彦の「好色本目錄」によれば、京都東山の僧、貞享四年「好色破邪顯正」を出して好色本の流行を難じた人で、井原西鶴の門人の別號を白眼居士といふ北條園水とは全く別人であるが、後に書肆のさかしらで園水作と入木した書まであるといふ。

この書は貴人から庶人に至るまで、當時の正月の風俗習慣をみ、更に正月の意味をひいてその始め起原來由を和漢の古典を引用して書いたもので、當時の風俗習慣を傳ふるよりも、その沿革を敘することに力を入れてゐる。併し公家、武家、僧侶、諸職、商人、百姓等に關するもの三十五種、その被服、調度、持物等に至るまで仔細に檢すれば、風俗研鑽の助となるものが多い。

熊谷女編笠

五冊 錦文流作 寶永三年刊

錦文流は西澤一風、都の錦、月尋堂、北條園水等と共に、西鶴の各方面をそれづくに傳へて、江島其磧の代表する八文字屋本への時期を繋いだ作者の一人で、大阪座藤社の邊に住み、俳諧を西鶴に學び錦頂子といふ。風流今兼好

「棠大門屋敷」「當世乙女織」「好色手柄咄」等の小説を作り、また淨瑠璃「本海道虎石」等數種あつて、櫻塚西吟、西澤一風と共に淨瑠璃三傑と呼ばれた。未だその傳記の詳しきを得ない。

熊谷女編笠はその序にいふ如く、寶永三年六月七日京都立賣堀にあつた女の敵討一件に趣向をとり、秋に至つて出版した際物小説で、卑猥な文字は弄しながらもその教訓ぶりはやゝ眞面目らしく見え、淨瑠璃の手法を以て、高實を離れ麗々陳套な七五調を用ひ、堀江川のはたる狩り(卷之二、第三)に靈をかけて女に化した男がある夜取り違へて婆形の靈をかけた爲めに見現はされる條等の如く、如何にも低級な讀者の笑を求めた。

只西鶴を繼承した浮世草紙に新機軸を出さうとした苦心は、巷談を潤色して一編を通じた趣向を立てさせ、こゝに太平の世に珍らしい女の敵討を脚色してその始末を詳しく書くのであつた。又この事件を扱つたものに、これと時を同じくして出た森本東鳥の「京縫鎖帷子」があり、「熊谷女編笠」にもよつた跡の見える近松の淨瑠璃「堀河渡談」がある。

この書寛政九年再版された。

## 一 夜 船

五 册 北條園水作 正徳二年刊

作者北條園水、一に風城園粹とも書く。また平元子、橘堂、滑稽堂と號し、雜髮して白眼居士と稱した。京都一條堀川の人、元來俳諧を以て立ち、西鶴を師とし、椎本才庵にも従つた。元祿六年八月西鶴の歿後、兩替町通二條上ル町の居を移して、浪花なる西鶴の草庵を守り西鶴菴と稱し、居ること七年京都に歸つて東洞院に住み、寶永八年正月四日四十九歳にて歿した。「俳諧家譜」に「一生涯清貧之人也」とある。著はすところ、俳書に「團袋」「特牛」「彌之

助「秋津島」燈笠等があり、又西鶴の「武道傳來記」「日本永代藏」を踏襲した「新武道傳來記」「日本新永代藏」及び「晝夜用心記」等がある。「誹家大系圖」にこの「一夜船」を「團水ノ名アレトモ別人ナリ」とあるが、今遂に従ひがたい。

「一夜船」は奇事異聞の集録で、かゝる奇異を説き妖怪を語るものは、既に寛文六年支那の「剪燈新話」を抜粋録案した「伽婢子」が、淺井了意によつて平易暢達な文章となつて世に流行して以來正徳享保に至るまで、この作に倣つて書名を擬するもの十餘種、貞享二年に「宗祇諸國物語」、井原西鶴の「近年諸國咄 大下馬」、元祿四年に淺井了意の「狗張子」、同五年に俳林子の「諸國新百物語」、同十一年に羅山子の「怪談全書」、寶永三年に青木鷺水の「御伽百物語」等を續出せしめ、蘆花に怪異談の一系統をみるに至つた。「一夜船」の作者がこの怪異談に筆を取つたのも、かうした當代の文藝の向ふところに影響されてゐると同時に、時代の好尚に投じたものと見られる。しかもその師西鶴が既にこの一般の風尚に従つて、「大下馬」「近代幽隱者」「懷硯」等を著はしてゐることも見逃してはならない。團水がこの奇事異聞を蒐集して冊子となすに至つた過程には、彼が最も親炙した西鶴の「大下馬」の影響が著しかった。「大下馬」は一人旅して諸國の怪異談を聞く形式のもので、この形式のものでは、天文年間以來たとされる江州佐々木屋形の幕下中村豐前守某の撰する「奇異雜談」、これにつゞいて「宗祇諸國物語」が早かつた。

「一夜船」もその序にいへる如く、京より大阪への乗合船の中にて關東關西の乗合の見聞にふるふ咄を書付けたといふ形式で、享保十一年「怪談諸國物語」と改題された如く、旅を背景とし諸國物語の形式を追つたものである。併し怪談とあつても全部がいふところの怪談ではない。五卷二十七話の中怪談とみるべきものは僅か四話のみで、他は巷談である。尤も前者は超自然分子を作者の想像に任せて、幾分強烈なものとし讀者の感興をそゝる如く描かれてゐるものをのみいふので、後者にあつても奇怪な妖惑の光を描き出さうとしてゐるものも交つてゐる。巷談とするものゝ

多くは全く道路の噂で從來のものに散見するところのものではあるが、幾分人間の内的生活と關係を持たしめ、「鬼の評判まち／＼」に心の鬼にさいなまるゝ話等は、心理的迷妄を自然に取扱つてゐるし、更に洒落た筆法で浮世草紙の世界の好話柄として感興深く讀まるゝ佳什「月夜の高坊主」等もみられる。

怪談の方面に於いてもその取材は、矢張り從來のものから餘り距つてゐない。そして非現實的傾向のものをも誠としやかに傳へんとして、支那の典籍を索め引いたり、「詞をかはせし姝女」の亡魂の話の條に幽霊論をなしたりしてゐるが、肝腎の修辭的用意を若干欠いてゐるために、文字から享ける印象は陰森な情趣をそぐものがある。只この種のもので錯覺幻覺を巧に描いて悽愴味のあるものは、「梅田香之助發心の事」の一篇であらう。

併しかゝる妖怪談を以てその集録の本領としたものではない。彼は只この世の奇事異聞を珍らしい話として傳へれば足りるとした。その意味に於いてまた彼獨得の妙味を認めることが出来る。

傾城色三味線

五冊 江島其磧作 元祿十五年刊

「傾城色三味線」には奥附に「ふや町せいくはんじ下ル町八文字屋八左衛門板」とのみあつて、作者の署名はないが正徳二年板、「野傾旅葛籠」、同四年板「役者目利講」に於いて、其磧自らその作であることを吹聴してゐる。八文字屋八左衛門、其磧は所謂八文字屋本の代表者で、八文字屋八左衛門は自笑と稱し、京都歎屋町に書肆を営み、其磧をして役者評判記、浮世草紙等を著はさしめ、自分の名で出版してゐた。自笑にも相當な創作の才はあつたやうに思はれるけれども、其磧が主なる作者であつた。

其磧は通稱江島屋市郎左衛門、先祖より京極通書願寺前に大佛餅を商ひ富裕であつたが、後業を轉じ書願寺通柳馬

場に移つた。若年の頃放蕩をつくし産を傾け、文章の才あるにまかせ其の友自笑に囑せられ、元禄十二年「役者口三味線」を出版し、頗る好評を得て八文字屋專屬の作者になつたが、未だその名を掲げなかつた。そして「傾城色三味線」「風流曲三味線」「傾城藝短氣」等を著し漸く八文字屋本の盛行をみるや、その待遇に不満を懐き、自笑と紛争して八文字屋と分離するに至つた。それは作者として其蹟の名を署せしめよといふのであるが、實は利益問題が主な理由であつたらしい。そこで其蹟はその子に書肆江島屋を開業させ、互に反駁競争したが八文字屋の社會に得てゐた本屋としての信用には對立が出来ず、又自笑もその争の不利なるを悟つたので、享保四年正月には遂に和解がなつて、「役者金化粧」を連名を以て出した。それ以後は其蹟の作品も自笑、其蹟の連名になつてゐる。連署には作者自笑、作者其蹟となつてゐるものもあり、或は前後してゐるものもあり、何れが本當の作者か判定がつかぬが、其蹟一人の著作に成つたものが随分多からうと思はれる。とにかく一時は不和になつたがよく提携した彼等は、元文元年六月七十歳にて其蹟先づ世を去り、自笑は延享二年十一月十一日八十餘歳で歿した。自笑のあとには子の其笑、孫の瑞笑が繼いで、八文字屋は三代に亘つて書肆の主と浮世草紙の作者とを兼ね、浮世草紙の世界に西鶴本に對立する八文字屋本の名をのこした。

「色三味線」は美濃版半截の横本、俗に枕本といふ體裁で、西川風の畫を挿んだ。初三卷に京之卷五話、大阪之卷六話、江戸之卷五話、四卷に鄙之卷四話、五卷に湊之卷四話皆短篇を纂め、各卷頭に遊女の惣名寄、位附、揚代から茶屋の名等まで、明細に廊中一切の諸式を附してゐるのである。それは役者評判記の形式で、遡れば古くから行はれてゐるのであるが、既に西鶴や團水も筆を染め、其蹟も一度試みた藝評を主とするもので、其蹟の著はした「役者口三味線」に於いては、藝評の外に開口と稱するものを附することによつて、從來の諸形式に特色をみせた。この開口は問答體をとつて藝評に移る序をなしてゐるのであるが、これとても既に古文に繰り返へされてゐるものである。こ

の開口を轉じて小説的構造を進めたものが「色三味線」に於ける附録の小説であり、その細見はかの藝評に當るものとみられる。蓋し役者評判記の藝評も古くは宛も遊女の細見の如き役目のために野郎の容姿の褒貶が専らであつた。さて其蹟が「色三味線」に附録とした短篇は、八文字屋の最初の浮世草紙で、西鶴を繼承したものであつた。そこには當時の花柳界を背景とした好色生活が書かれてゐる。その好色生活といふのは、男女の性的關係もあるが、社交から享ける豊富な情趣を味ひ、社交の興味に身を浸して行くを主とした生活で、かゝる生活は一般の社會には性的關係の自由がある爲に存在を許されないもので、遊里といふものゝ發達を來し、貞操から解放された女性即ち遊女が社交婦人として活動した。かゝる意味の好色生活の爲に遊里に特有の慣例習慣或は禮儀作法等が出來た。即ち西鶴以來の好色本は斯ういふ生活を取扱つたもので、本書も亦その一つであるが、既に行詰つた浮世草紙の單調に倦きた讀者に對して、新機軸を出さねばならなかつた時機に、「野傾旅葛籠」に於いて彼自らが云ふ如く、西鶴に倣つて作つたものであり、精細を加へた描寫は却つて力を弱くし通俗化したのが、よく舊殻を脱し新粧を擬らした形式と構想とは、八文字屋の聲價を擧げしむるに十分であつた。それは又所謂八文字屋の七三味線と稱せらるゝ、この形式や趣向を眞似たものを續出させ、八文字屋の浮世草紙として最も見るべき傾城物の濫觴をなした。

## 寛濶役者片氣

二册 江島其蹟作 正徳年間作

自笑と紛争して分離した其蹟は、氣質物と呼ばれるものを創めたが、これも亦概して西鶴を踏襲したもので、その筆致を摸倣し剽竊を敢てしても、西鶴が鋭利な觀察と適運な文章とに到底及ばなかつた彼は、人々に有り勝な弱點、特殊な性癖、趣味、嗜好を寫し出して各階級の特種性を明にするために複雑な趣向を構へ、その筆致を誇張させねば

ならなかつた。従つてそれらに現はれてゐる滑稽は、西鶴にあつては觀察眼から來たところのものであるが、彼にあつてはその筆先を學んだだけで、人間性情を穿つことが薄かつた。只その趣向の構成によつて滑稽を巧に描いてゐるものがあつた。

「寛瀾役者片氣」は色三味線作者と署名して江島屋市郎左衛門板行であつた。かの八文字屋と分離してゐた正徳年間に書かれた所謂江島屋本で、「野傾旅葛籠」に於いて、自笑を攻撃し從來八文字屋本と稱するものは皆自分の作であることを吹聴し、こゝに亦色三味線作者と署名したのであつた。これは氣質物最初の作とされるものであるが、内容は未だ氣質物の體裁を備ふるに至らず、上卷に寶永六年十一月朔日に死んだ、傾城買濡事の開山として有名な坂田藤十郎、下卷にその前に故人となつた江戸の荒事師市川團十郎、和事師中村七三郎のことを主として、遊女たちから妾、後家、比丘尼等の好色沙汰を寫したもので、それらの趣向が餘りに世間に顯著な噂であり馴染の深いものであつたからして、誇張はあり乍らもなほ事實らしさを失はず、且つその強調から來る滑稽があつた。併しまた下之卷第二「市川が心底引わつて見る木挽町の手管娘」、第三「女道衆道の堺町遊はちがひくぎぬき」を讀むものは、西鶴が「好色一代男」卷四「替つた物は男傾城」、「好色五人女」卷五「戀の山源五兵衛物語」の「情はあちらこちらの違ひの趣向の踏襲されてゐる痕をも認めなければならぬであらう。氣質物流行の享保五年に「好色五人女」が「當世女容氣」と改題されて出たのもうなづかれる。只西鶴を學んだ其積も觀察の眼界を廣く構想を複雑にしたことは、讀者の思想の推移を物語つてゐるものではあるが、矢張り幾分の進歩とみるべきであらうか。



八文字屋の氣質外題は「寛瀾役者片氣」が最初であるが、氣質物と總稱されるもの、備をなし流行を來したのは、正徳五年出版の「世間子息氣質」、その翌年出版された「世間娘氣質」であつた。「諸國武道容氣」はこれに次いで出たもので、「小説年表」には自笑作とあれど署名はない。この出版はなほ其頃自笑の分離してゐた時で、卷末に「野傾旅藪籠」等其頃の著作を廣告してゐるところを見ると、自笑作とすることはどうか。或はその商略であるかもしれないが、作者は詳かでない。

「子息氣質」「娘氣質」が町人氣質をあらはす爲に、町人の生活狀態を寫したのに對して、これは武士氣質を現はすために、武家生活の基調をなす義理の精神を狭く限定した敵討によつて武士の典型を描かうとしたらしいが、常識的な敵討物語である。併しそこに現はれてゐる武士は町人と接近し交際を持つたものであり、従つて多くの點に於いて優れた武士の感化を受けてその生活を向上した町人は、平和な時世に適し難い武家生活を浸潤してゐるあとがみられる。即ち卷之二の「京の噂」に於ける町人に苦しめられる武士の窮迫、鼓打の内儀が夫の敵討に武士にもおとらぬ精神と教養があらはれ、卷之二「阿州の咄」に於ける武士は、一町人にそのかさされて利に傾き惡事に加擔する。その他武士の遊惰と放縱及びそれから生ずる罪惡等を敘してゐる。それは又當世の武士氣質とも云へるのである。

## 梅若丸一代記

### 五册

八文字屋自笑作  
江馬其礦作

享保十九年刊

西鶴の傳統を引いた八文字屋本は、其頃に依つてその一面を踏襲する傾城物、氣質物を創めたが、又淨瑠璃歌舞伎から趣向の複雑を借りて浮世草紙の本領を没却する傾向を生じた。それは八文字屋本の大多數を占めてゐる傳奇的の物語で、内容としては狹義の義理物語に外ならないのであるが、從來の浮世草紙の寫實的なのに比して、これは餘程寫實を離れた空想に遊ぶといふやうな物語で、一面假名草紙や實録物の脈を受けると共に、淨瑠璃と密接な關係を

持つてゐる。しかも空想的な乃至夢幻的な淨瑠璃の時代物に餘程近いもので、かゝるものがこの時代に盛んに浮世草紙の中に流行したことは、内面的には矢張り淨瑠璃の空想的夢幻的な時代物を産み出した精神と同じ精神が、この傳奇物を産み出したといふ關係でなければならぬ。又外面的にも密接な關係があつて、近松の「國性爺合戦」が大成功を博すると、浮世草紙の方でも「國性爺御前軍談」といふ儘かに淨瑠璃を幾らか俗衆に解り易く書き直したものが出たり、更に一層多くの者に解らせようといふ意味で、「國性爺明朝太平記」が出たり、竹田出雲の「大内裏大友眞鳥」といふ淨瑠璃が、八文字屋から其續によつて同じ名の浮世草紙として出たりした。このやうな流行の勢は、其續等をして「本朝會稽山」「奥州軍記」「義經倭軍記」等益々多くの作を書くに至らしめた。

「梅若丸一代記」も亦その一つである。その結構は淨瑠璃の時代物と同じく、善人と悪人とが闘つて幾多の紛争の後に善人の勝利に歸するといふので、この題材の骨子をなすものは近松の「雙生隅田川」の筋であつた。それは古く謡曲「斑女」「隅田川」にその傳説が諷はれ、明暦二年の「角田川物語」といふ假名草紙に基いて作られた。これが竹本座の勾欄にかゝつたのは享保五年八月で、後十四年にして「梅若丸一代記」が出た。既に淨瑠璃に題材を選ぶことを知つてから二十年近くも過ぎた。最早「明朝太平記」「大伴眞鳥」の如く淨瑠璃の踏襲そのものではない。作者は實錄物を参照したお家騒動とか、淺草寺の一つ家の傳説等を取り入れる技巧を怠らなかつた。それは單調に倦かれた浮世草紙に一回轉を試みようとし、結構の複雑と趣向の珍奇とを以て新味を出したものではあつたけれども、その價值は少く今日では八文字屋本としては忘れられようとしてゐる。

この書天明八年に「都鳥妻戀笛」と改題再版された。

其磧が歿してからなほ十年も生き永らへた自笑は、嘗て八文字屋と對立した時に代筆を依頼した多田南嶺をして其磧のあとの代作をさせた。

南嶺名は義俊、字は政中、通稱を兵部といふ。坪井鶴翁の門に入り國學を修め、又俳諧を半時庵淡々に學んで男飾と號した。好んで戯作をなしたけれども自ら名を掲げず、南嶺の作とせられるこの「諸藝袖日記」の如きも、その序に八文字屋自笑、同其笑作とのみある。

「諸藝袖日記」は其磧の作を襲つた氣質物で、その序に「往昔の淨瑠璃に鎌倉日記とかやおもひ出て諸藝の風骨を」書き分けたとある。この「鎌倉袖日記」は松本治太夫の正本で、おそくも元祿初年迄のもの、寶曆七年板「外題年鑑」に「井上氏の日向景清を松本治太夫方にては鎌倉袖日記と替へたとある如く、井上播磨掾の「日向景清」の外題替へてあつた。これと「諸藝袖日記」との関係は「國性齋明朝太平記」「梅若丸一代記」等とは全く異つたもので、只「鎌倉袖日記」が鶴ヶ岡八幡の社參に頼朝の無禮講の遊興から、その趣向がすめられてゐると同じやうに、「諸藝袖日記」では頼朝の御前に於いて諸大名が一興ある物語をなすといふ形式の近似と、古代の事をもすべて現代化してゐるといふ共通點を認める位で、やはり氣質物に共通な失敗を可笑しく描き、只笑ひ草にしようとする趣向で、その態度にはいくらか其磧の面影が窺はれる。

大和 書齋 風流俳人氣質

五 册 兵作堂龜友作 寶曆十三年刊

多田南嶺によつて僅かに其磧のあとを襲はしめた八文字屋は、寛延三年南嶺の歿後益々衰運に傾き、明和四年書肆八文字屋は亡びたけれども、その作風の餘勢は龜友等をして、何々氣質と稱する活氣も奇譽も失はれた平凡な小説を

多く作るに至らしめた。只其蹟が親仁とか娘とかを扱つたのに對して、俳人とか茶人とかを職業の方からみて、そこに新材料を出さうとした。

「風流俳人氣質」は月並宗匠を主題にして、それに附随した色とか愁とかを描いたもので、形式内容の上からみれば、八文字屋の餘喘を保つたものではあるが、冗漫な常識的なものである。

### 諸道聽耳世間猿

五冊 和譯太郎作 明和三年刊

作者和譯太郎は上田秋成の名を以て廣く知られてゐる。秋成通稱を東作といひ、余齋、休西、無腸、鶉居、藪枝崎人等皆その號である。浪花の娼家の私生兒として生れ、富商上田某に養はれたと傳へる。若い頃は放蕩な生活をしてゐたが天性の才子で、俳諧を凡圭に學び、加藤宇萬岐に國學を修むると共に、都賀庭鐘に儒學を學び、和歌、俳句、書畫、茶事何れもこれを能くした。年三十八の時、火災に罹つて家産を失ひ、一時醫を業としたこともあつたが、性狷介峭直人と交らずといふ風で、晩年は京都の南禪寺畔に隠れて寒酸な生活をおくり、七十六歳の文化六年六月二十七日、羽倉信美の家に歿した。その文學上の作物には種類が多く、「藤簍册子」「瀾辯談」等から、この書と共に八文字屋の系統をひいた「世間姿形氣」、後の讀本作者の典範をなした「兩月物語」「春兩物語」等の作が顯はれてゐるが、又「冠辭考續編」「萬葉集見安補註」「古今集打聽校補」等の國學上の著書もある。

「諸道聽耳世間猿」は一時流行を極めた八文字屋の氣質物の系統をひいたもので、その趣向とするところは、彼が遊蕩時代の見聞を材料として色々の失敗を滑稽的に描いてゐるのであるが、自笑、其蹟の作に比するに、人事の微細を描寫するといふことよりも世間を皮肉な限で觀察し、その弱點を諷刺してゐる。併し思想や學才の優れてゐる彼の

文章は、其碩と同様な碎けた文體で、西鶴さながらの筆致をさへ見せてゐる。

赤烏帽子都氣賀

五冊 永井堂龜友作 安永元年刊

作者龜友は兵作堂、後永井堂と號す。その傳記を得ない。明和安永頃「風流茶人氣賀」「世間姑氣賀」「小兒養育氣賀」「世間旦那氣賀」「風流仲人氣賀」等、其碩の氣賀物の筆意を模したものを出したが、いづれも多く言ふに足らないものであつた。

「赤烏帽子都氣賀」は趣味や嗜好や境遇等に附隨する自慢、それを誇張してそこに失敗を描いたり、滑稽な現象を寫したりしてゐると共に、その序にもいへる如く其碩以來標榜した教訓的の文字をして、實際の意味を現はしてゐる。

西山物語

三冊 建部綾足作 明和五年刊

建部綾足は一名英龍、字は孟喬、初め涼袋と號し後涼袋と改む。また吸露庵、寒葉齋等の號がある。弘前藩の家老格喜多村校尉の二男に生れ幼名を金吾と云つた。若い頃故あつて亡命し、その姻戚の姓建部を稱し、京都東福寺の坊主になつたり、長崎へ行つて繪を習つたり、還俗して江戸に出て俳諧師となつたり、賀茂真淵について古學を修め、片歌を唱へたり等したが、一向世にむかへられず、且つ猖狂無行一世を玩弄するといふ街氣と争氣との強かつた爲めか、江戸にも京都にも居つかず田舎まはりとなり、安永三年三月十八日武州熊谷にて五十六歳で歿した。併し多藝多才の嗜んで、當時國學の盛行により眞淵に就いて養はれた彼の術學的尙古癖は、古を重しとし、今を輕しとし、用語

にすら古を尚び、遂に片歌道守と稱して片歌を主張し、中古の文體を綴り、上中下三冊を中古の物語風に卷を名づけて十卷とし、且つその出典と註釋をさへ加へた「西山物語」を作るに至らしめた。もとより片歌の挽回は行はれなかつたが、讀本の先驅として文化文政の小説界に影響したことが頗る顯著であつた。

この物語は綾足が明和四年京都に遊んで、西八條村にあつた巷談に基いて作つたものだといはれる。然るにその趣向に就いて、上田秋成が文化三年卯月十七日「西山物語」の主人公大森七郎のモデルである渡邊源太といふ者に邂逅して、その物語の事實譚を作つて「西山物語」を「よき人をあやまつたづら文」とし、「是もはやくに亡ぶべき數」なるものと罵倒してゐるが、綾足が小説としての結構を事實に關係のないところのものをあしらつたことの非難で、その古典趣味に捕はれて人情を寫し趣を盡すことの出来なかつた小説としての批難ではなく、又古今を混同した體式の文章のそれでもなく、畢竟「西山物語」の小説としての批評には當らなかつた。併し綾足の讀本作者としての位置を相當認めたる曲亭馬琴の「本朝水滸傳を讀む並批評」に於ける擬古體の雅文に對する批難は、かなり手傷いものであつた。そして綾足は「水滸傳」や「源氏物語」が現時の現代語で書かれたことを知らなかつたのであるといひ、更に「綾足をして尙世にあらしめば、まのあたりはこのことわりをしかぐと、解示して蒙霧を啓せまほしく思ふかし」とも云つてゐる。これはまさしく綾足の急所をついたものであつた。併し金龍敬雄老杜多撰の序に、從學の士をして古を以て今を御し、俗に即いて雅となすの術を曉らしめんと欲し、乃ち時事を記して三卷となすとあるをみれば、作者の意志また別途にあるを知るべきであらう。

上方の文學が漸く衰へた明和、安永、天明の頃は、恰も江戸に小説の萌芽した時代であるが、それとても元祿前後江戸に行はれてゐた文學の流れとみるよりも、寧ろ上方文學が東に移つて、江戸にその繼承者を出したとみるべきもので、馬琴によつて大に發展した讀本は、かの支那文學から脱化した物語を繼承したものであり、村田春海や六樹園等が雅文で小説を著したのも、矢張り綾足の「西山物語」を承襲したものであつた。

この書の作者六樹園は、畫家石川豐信の子、名は雅望、字は子相、通稱を糠屋七兵衛、後五郎兵衛といふ。江戸小傳馬町三丁目に住み、その地もと六本木と稱せしにより六樹園と號し、また宿屋を営んでゐたため狂名を宿屋飯盛といひ唐衣橋州、大田南畝に狂歌を學び、遂に家業を廢めて儒を古屋昔陽、國學を津村添庵に受け、「源注餘滴」「雅言集覽」等の著書をなし、江戸國學者の雄であつた。その戯作は餘技ではあるが、文政十三年三月二十四日七十八歳で没するまで、「都の手ぶり」「北里の十二時」「東なまり」「飛彈匠物語」「しみのすみか物語」等名高いものが多く、狂歌師としても作者としても顯はれてゐる。

「近江縣物語」は北尾重政の畫を挿んで行はれた讀本で、その序に近江の閑居にて一老人の語れるまゝを記載せるものとあれど、夙興亭高行の跋に「此物語せる翁のさまけしうはあらさきさためてりふをうなといへる人の身をかへてうまれ出たるにやとうしのかたられたる」とあるが如く、その結構は李笠翁の「十種曲」中の「巧園傳奇」を襲案し、藤原保輔、同齋光といふ強盜に配するに、佳人蘭生、才子梅丸、或はその戀仇常人等を以てせる一篇の物語で、既に京阪の作者がなした手法を以てしたものであつたが、寧ろ原作の面影をとどめてゐるものが多かつた。しかしその文章は「西山物語」等に比し迥に平明典雅なものである。

— 解題終 —

目次

正	月	揃	一
熊谷	女編	笠	壹
<small>入繪一</small>	夜	船	二〇九
傾城	色三味線		二七
寛濶	役者片氣		三二
諸國	武道容氣		三五
梅若丸	一代記		四三
鎌倉	諸藝袖日記		四九
<small>言大和</small>	風俗	講人氣質	五二
諸道	聽耳世間猿		六〇九
<small>入繪</small>	赤烏帽子都氣質		六九
西山	物語		七九
近江	縣物語		八一

— 目次終 —



昭和三年十二月十日印刷  
 昭和三年十二月十五日發行

特	價
第八回配本	
追加募集	
第四回配本	

【非賣品】

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

株式會社 博文館

大橋勇吉

東京市小石川區久堅町百〇八番地

君島 潔

帝國文庫  
 (第一編)  
 珍本全集

編輯者 兼發行所

右代表者  
 取締役社長

印刷者

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地

發行所 株式會社 博文館

振替口座東京二四〇番

製版所 共同印刷株式會社  
 印刷所 共同印刷株式會社  
 製紙所 王子製紙株式會社  
 製木所 中條製本所  
 製函所 香取製函所